君はママの宝物 ④

「気になる子」との365日

新垣 道代

コミュニケーション

丁寧に繰り返し向き合い

息子が通院していた県立南部医療センター・こども医療センターこころの診療科で、土岐篤史医師に2年間お世話になった。

私の名前より数字を言うのが早かった息子。先生に「発達障がいにおける高機能自閉症」と診断された日、2歳5か月の段階で、どうやら自分が誰か理解していないことが分かった。なるほど、だから名前を呼ばれても振り向かないんだ。ではどうすればいいのでしょうか？　おもちゃで遊ぶ息子のそばで、告知を受けた患者家族と思えないほど活発な問答が繰り返された。

先生とやりとりしながら、いかに息子とのコミュニケーションが一方通行だったかにも気付かされ、ハッとした。こちらが質問しても目線も合わず、反応がない関係に慣れきって、息子の返事を待つことがなかった。「僕、何歳？」と他人に尋ねられても、息子に代わって私が対応。不可解な行動をするこの子がどう見られているか相手の顔色をうかがい、息子を見ていなかった。

「診断されてよかったです。これで腰を据えて彼と向き合うことができます」。まっすぐ堂々と伝えた。ようやく立てたスタートライン。診察室を出た後、同席していた、息子が通う保育園の園長と応援してくれている保護者の方は、涙していた。診察前までは私が泣いていたのにね。

その後の診察は3か月に1回。1カ月ごとにつけた成長記録をもとにこちらが質問をし、次にクリアすべき発達の課題はこれ、と話をした。どうすればこの子の発達を支えることができるか、園長や保護者仲間、みんなで試行錯誤した。

特別なことではない。例えば、言葉で呼び掛けるだけでは、息子は人に話しかけられていることが分かりにくいので、そんなときは、肩をたたきながら「ねえ、この人が何かお話しているよ」と根気よく促す。相手がどんな表情をしているか、それはどんな気持ちでいるからなのかを考えさせた。

子育てに疲れたときは、思い切って休んで、エネルギーをためる。自然にふれるのが癒やしのひとつ

ゆっくり、繰り返し、丁寧なかかわりをしてきた結果、今では私が生半可な返事をしていると「顔を見て話して」と息子にしかられるのだから驚きだ。

親子をじっくり向き合わせ学ばせる先生のアドバイスは、私の子育てのエネルギーになった。しかし、診断されても、受け皿がなければ沖縄の子どもの育ちは保障できない。診断のあるなしにかかわらず、親子で楽しく遊びながら試行錯誤できる「親子教室」「親子通園」に、どこに住んでも誰でも通える環境をつくりたい。

（県子どもの未来を考える親の会連絡会副会長）

H21.3.30
沖縄タイムス